

だという話も聞かされはしましたが、はつきりしたこと  
はなんとも分りません。暗闇の中です」

このように占賀さんは「2・2協定」の真相は「暗闇  
の中です」と語っています。確かに「2・2協定」は1  
967年のことであり、ほぼ40年も前のことですので真  
相を明は難しいことかと思いますが、しかし、仮に真相  
は「暗闇の中」だとしても、その「暗闇」に光りをあて  
ることによって、少しは真相に迫ることができるとと思  
います。私にとって宮崎先生の「雲乱れ飛ぶ」作成へ  
の協力、斎藤さんとの10回近くの打ち合わせ、そしてシ  
ンボルームの開催等は、まさに「暗闇」に光りをあて  
るための作業だったのです。この間、多くの事実を知る  
ことができました。そして「2・2協定」の全体像がは  
ば見えてきたような気がします。

それでは、真相に迫るために、最後に「2・2協定」で  
終る闘争の過程を追ってみたいと思います。  
1966年11月30日には「全学スト」に突入した「明  
大費闘争」は、年が明け1月になると、4年生の卒  
業、就職問題、そして2月の入学試験が目前に迫り、学  
内の緊張感は一気に高まつた。まず「体育会」が動きだ  
した。14日、「学園封鎖抗議集会」を開催して「大学当局  
及び学生は、この混乱の收拾のため早急に歩み寄る方向  
と態度でもって努力されなければならない」との宣言文  
を発して、これまで比較的の静かだった「体育会」がその  
存在を誇示しながら、ここにきて表舞台に登場。一方  
「全学闘」は20日の「記念館団交」に8000名を動員  
し、学生は記念館だけでは収容できず、91、95番教室及  
び中庭で「団交」に参加。しかし議論は曇り合はず「団  
交」は虚しく空軒。「全学闘」として、この日の80  
0名の動員はこれまでの最大で、しかしその力をもつ  
てしても、大学当局に白紙撤回を認めさせることはでき  
なかつた。闘いは今度の手詰まり状態に陥つた。23日に  
なると「体育会」は学生部長に「学生一般及び体育会員  
の異常な熱気は、現状については、もはや体育会本部に  
拒否されても席を立つことなく再考を促して休憩を求める  
ことのみ伝えたのです。そこまではシナリオ通りこと  
が進んだのですが、休憩後も小出はかたくなに拒否を練  
り返すのみでした。それは晴天の霹靂のような事態だつ  
た。何年も後になつてのことですが、僕らとは違つた政  
治的な動きや明治大学の社学同OBの某氏らの動きがい  
ろいろとあって、それによつて僕らの工作が潰されたの  
だといふ話も聞かされはしましたが、はつきりしたこと  
はなんとも分りません。暗闇の中です」

田總長・斎藤克彦全學連委員長のラインです。後者につ  
いては、当事者から具体的な内容を聞いていませんので、  
どのような工作がなされたのかは分りませんが、斎藤さ  
んが常常「武田總長の当時の日記かメモが残つていれば  
全て頭からなる」と言つていましたので、二人の間に  
何らかの交渉があつたのは確かです。一方、宮崎・大内  
ラインについては「全學闘委員会の委員長は大内君で  
あり、学生部長と大内委員長の話し合いが非公式交渉の  
主流である」と当人が堂々と認めており、「裏面工作」  
の詳しい内容は本の中で明らかにされています。

さて、要協のための「裏面工作」は着々と進み、28日  
の「和泉校舎団交」ではもたつきながらも、29日の「記  
念館団交」で要協が成立するのが確実な状況になりつつ  
あります。「体育会」はこの流れを確実なものとするため、  
28日(①) 本日の時点で示された理事会の姿勢を十分に  
理解し、解決への方向性を根強く、かつ、早急に推進す  
ること(②) 学園封鎖の内外における影響の重大性に  
かんがみ、全學生の手によって、速やかにパリケードを  
撤去し、授業再開に協力せらるべきことを要望する」との  
アピールを発した。このような、要協必至の事態を見計  
らって、ここぞとばかりに、中核・解放・M・L派が介入  
してきた。この時の様子を中澤さんは次のように語つて  
います。「30・29の間違い」団交を開かせたらアントは  
拒否するから、それで席を立つようなどをしないでく  
れ、小出にもう一度考え直すように休憩を要求してくれ。  
その結果、学生の事を考えて、大学側が折れるようにな  
ったから」というものでした。うるわしい師弟関係を演  
出したがつているのだなと思い、こちらの側の代表に、  
部長が、やる以外ないという判断をだして、「(体育会)  
の陣取る」記念館に突っ込みましたわけです」

これで、「記念館団交」は中止。その後学生部長の  
仲介により「大学院団交」が設定され、理事会との最終  
の交渉に入る。理事会は「学費改訂による昭和42年度の  
授業料および入学金の値上げ分については、昭和42年9  
月末まで大学が別途保管し、具体的の方策の決定の日をも  
つて昭和42年度予算に計上するものとする」(第2次案)

「学費改訂による値上げ分については、9月末日まで延  
納を認めるものとする」(第3次案)と譲歩をみせたが、  
「全学闘」・「II部共闘会議」はこれを拒否。団交の長  
時間化と混亂の中、翌30日早朝、理事会を名目として  
機動隊が導入され、学生は全員学外に排除された。その  
頃にはバリケードも撤去され、学内は完全に「体育会」  
に制圧されていた。ああ、これで全て終りかと思いまし  
ます。

私の知る限りでは、妥協に向けた裏のルートは「一つあ  
りました。ひとつは「雲乱れ飛ぶ」の中で、「裏面工作」  
として書かれている今野氏(大学新聞OB)が仲介し  
た。バス交じないよ。僕らは、授業料値上げは白紙撤回さ  
せるという路線だった。そうした方針で、武田孟理事長

た。しかし、今から思うと、このような厳しい局面でも、

しぶと、妥協の道を探る人がいたのです。60年安保ブントの篠田邦男氏です。篠田は当時大生協にて、生協のみならず学内各方面に相当の影響力をもつていました。特に明治のブント系の学生運動に対しては、その影響力は無視できないものでした。

篠田氏は「ブントから取扱だというので、お勝立てをして」と言わされたからそれをした」と認めています。しかし、2月1日のブント「学対・政治局合同会議」で收拾の方針が、例の6（反対）・3（賛成）・1（保留）で否決されました。にもかかわらず、ブントの方針に反して、「お勝立て」された「2・2協定」は調印されました。篠田氏は、ないしは篠田氏を中心としたグループは、独自の判断で「2・2協定」を強引に調印へともらっていました。キーマンは大内さんでした。その大内さんを「2・2協定」に調印するよう説得したのは、間違いない篠田氏です。大内さんは「調印の1週間ぐらい前から、篠田さんはコントクトがあって、彼とは話をしていた。調印の場所が設定してあるという話も彼から聞いたのです」と、以前インタビューに答えていましたが、これは今回のシンポジュームで覗くかとなつたことなのですが、実は1週間程前から篠田宅に居て、調印もそこから向かったとのことでした。

大内さんは語っています。「それ（調印）を決断させた要因としては、明大社学同の組織的な防衛と再建プランが確定されていたからです。この取扱で、お前の政治生命は、確実になくなると言われていました。その取扱後は組織的な展開まで、考えられているのなら、そして、俺一人が、悪者になれば、この局面をなんとか脱しきれるのなら、ヤツテやろうという形で、決断したのは、事実なんですね」と。篠田氏の説得をうけ、決断した大内委員長は、篠田宅から、2日未明「お勝立て」され、た銀座東急ホテルに向かい、「2・2協定」に調印したのです。これが、謂うところの一晩の調印です。

「明大自治会（学生会）の指導権を失うことは、明大ブントにとっては死活問題である。学費値上げは大学当局にとって死活問題である。大学当局から分配される予算は体育会にとって死活問題だ。明大自治会もまた、大学当局との平和共存を維持することは死活問題である。その上、明大ブントは生協も握っている。これらの既得権こそ明大ブントにとって死活問題である」と小野田譲

二さんが「革命的左翼という概念」の中で書いていまし

たが、まさに、「2・2協定」は明大関係者にとっては、死活を賭けた妥協の産物以外の何物でもなかつたと言え るのでしょうか。

明大学費闘争が、このように「2・2協定」をもつて終焉せざるをえなかつたのは、当時の明大学生運動、就中ブント系の運動のおかれていた不幸な状況によるものと考えられます。その点について、小森さんは次のように指摘しています。「明治の立場からいふと、あの年に学費闘争があつたというのは非常に不幸であった。3派全学連の委員長を抱え、しかもブント政治局内部の対立が顕在化して、ブントの政治みたいなものを、単なる学内闘争がすべて負わざるを得なくなつていただけだか ら」と。

1966年12月、学費値上げ発表（15日）の直後、全学連再建大会（17・18・19）は、パリケードの明大記念館を主会場として開催された。社学同・中核派・解放派を中心とした所謂「3派全学連」の結成大会で、斎藤克彦が全学連委員長に選出された。委員長・社学同・副委員長・社学同・解放派・書記長・中核派の布陣で中核派、解放派としては不満の残るものであった。内部では、激しいハゲモニー争いが当初からあり、特に中核派は全学連のハゲモニーを掌握すべく、虎視眈々とそのチャンスを狙っていた。そんな時、「ブント・明大学費闘争で妥協の動き」との情報が入った。中核派は、小野田さんも認めているように「ブントを追いつめ、秋山全学連委員長を実現する絶好のチャンス、そのため全都の中核派活動家を集めて圧力をかける」動きにでた。中核派は解放派を誘い、「日部共闘会議」のM1派を媒介にして、明大ブントは妥協やむなしで動きだし、マル戦派は徹底抗戦を叫び、関西ブントは革命的敗北主義を主張すると、一方で、主張する関西ブントは、他党派、特に中核派に突き上げられ、加えて明大ブントに対する不信感もあって、日本の学生運動は高揚期を迎えるとしていました。そのような気運を背景として、66年9月にはブントの再建第2次ブントの結成、12月には「全学連」の再建「3派全学連」の結成がなされました。まさにそ

の時、明大学費闘争は同時進行的に闘われていたのです。その後、中核派が、「3派全学連」を私物化することに成功し、それに委協阻止の動きを始めました。29日の記念館への殴り込みが正にそれでした。当時、ブントの学対活動家を集めて圧力をかける動きにでた。中核派は解放派を誘い、「日部共闘会議」のM1派を媒介にして、明大学費闘争に直接介入、それが29日「記念館団交」潰しの殴り込みです。

中核派の目論みは見事に当たりました。ほぼ決まりかけていた妥協への動きに、一度ストップをかけ、それでも妥協に走る部分を鬪争から浮かせることにより、明大内にそしてブント内にも分裂と対立を作り出す、正に、その通りになりました。意見事というしかありません。中核派は狙っていた秋山全学連委員長を実現しました。その後、中核派が、「3派全学連」を私物化することによって、その勢力を拡大していくことは、周知の通りです。

この中核派の一躍躍を許したのはブントです。誕生

間もない第2次ブントのひ弱さです。第2次ブントは、

学費闘争の直前66年9月、統一ブント（関西ブント+東京ブント）とマル戦派が合流して結成されたものです。まだ、結成されて間もないということから、明大学費闘争の指導は「明大独立社学同」系の古賀さんや、斎藤さんには全面的に任されていました。その指導を受け、当初、私たちは勝てる闘いだと思っていました。その後の事情を、指導者の一人であった中澤満正さんは次のように語っています。「明大固有的問題としては、農学部の不正入反対闘争、これに勝利して、II部の復学闘争、これに勝利して、この中で、いわば自治会の権威と力といふものを組織的にずっと蓄積してきた経験があるわけですね。だから僕らの場合には、当時の明大社学同の指導部というのは学費闘争も勝てる闘争だという意識があつた」

ところが、年が明け闘争が手詰まり状態に陥り、妥協のはなしが難になり出した頃になると、ブント指導部は統一した方針で強力に指導をおこなう必要が求められた。そこで、ハゲモニーを握る中核派は、年が明け闘争が手詰まり状態に陥り、妥協のはなしが難になり出した頃になると、ブント指導部は統一した方針で強力に指導をおこなう必要が求められた。そこで、ハゲモニーを握る中核派は、年が明け闘争が手詰まり状態に陥り、妥協の動きが止まってしまった。この闘いが、単に学内問題にとどまれば、学内諸団体の利害、得失を調整しながら、ある落し處をみつけ、妥協がなされたと思います。明大学費闘争は、私学の常として卒業・入試を目前にして緊張した局面を迎えるました。「体育会」が登場し圧力をかけ、「全学闘」の闘いに限界が見えてくると、学内に清水はさすがに場数を踏み、僕などとは格が違つてゐる。大学費闘争では、小野田が全学連のハゲモニー取りの失敗などで飛ばされ、60年安保ブントの全学連書記長である。

そのときのブントの状況を知ると悲しくさえなります。

塙見さんは当時の事を次ぎのように語っています。「明大学費闘争は、小野田が全学連のハゲモニー取りの失敗などで飛ばされ、60年安保ブントの全学連書記長で、中核派の実力者だった清水丈夫が陣頭指揮に出てきた。清水はさすがに場数を踏み、僕などとは格が違つてゐる。大学費闘争では、小野田が全学連のハゲモニー取りの失敗などで飛ばされ、60年安保ブントの全学連書記長である。

これまで、述べてきたことを少しまとめてみます。明大学費闘争は、私学の常として卒業・入試を目前にして緊張した局面を迎えるました。「体育会」が登場し圧力をかけ、「全学闘」の闘いに限界が見えてくると、学内に清水はさすがに場数を踏み、僕などとは格が違つてゐる。大学費闘争では、小野田が全学連のハゲモニー取りの失敗などで飛ばされ、60年安保ブントの全学連書記長である。

これまで、述べてきたことを少しまとめてみます。明大学費闘争は、私学の常として卒業・入試を目前にして緊張した局面を迎えるました。「体育会」が登場し圧力をかけ、「全学闘」の闘いに限界が見えてくると、学内に清水はさすがに場数を踏み、僕などとは格が違つてゐる。大学費闘争では、小野田が全学連のハゲモニー取りの失敗などで飛ばされ、60年安保ブントの全学連書記長である。

これまで、述べてきたことを少しまとめてみます。明大学費闘争は、私学の常として卒業・入試を目前にして緊張した局面を迎えるました。「体育会」が登場し圧力をかけ、「全学闘」の闘いに限界が見えてくると、学内に清水はさすがに場数を踏み、僕などとは格が違つてゐる。大学費闘争では、小野田が全学連のハゲモニー取りの失敗などで飛ばされ、60年安保ブントの全学連書記長である。